



祭り事

クリスマス、お正月と続く時期は世の中が騒がしく賑やかになります。クリスマスが終わると年の暮れのもの悲しさが少しあります。でも大晦日と新年が来て国中がまた盛り上がります。正月が終わると、寂しさを感じながら仕事始めのどさくさに突入していきます。

このつれづれが読まれる頃は、ちょうど正月気分が消え去って、日常の生活に埋没している時期ではないでしょうか。人間は日常生活というものに喜怒哀楽を自ら作り出し、人生にメリハリをつけています。大昔からの祭り事は、決して楽ではない毎日の生活にエネルギーを与えてくれます。また、近所の仲間や親族との集いによる暖かい人間関係を育む役割もあります。そもそも人間は社会性のある生き物で、社会の一員であることが人間を正常に生きさせてくれます。

職業としてのデザインは、人間と社会という二つの要素が必ず含まれると思います。機器のデザイン、建物のデザイン、コミュニケーションのデザイン、サービスのデザイン、システムのデザイン、はたまたビジネスのデザインなど、全てにおいて人間と社会が介在するのではないのでしょうか。個人が自分だけのためにデザインするものは、社会から閉ざされたものでも良いのですが、職業として関わるデザインはいろいろな立場の関係者がそこに存在し、影響範囲の大小はあるにせよ社会と向き合うことになります。例えば人間が直接利用しないものでさえ、それが巡り巡って人間社会に影響を及ぼすと考えます。人の住まない未開の地の自然環境を守るエコシステムをデザインした場合、それは地球の生態系の中にある人間社会にとって重要なことは言うまでもありません。

デザインするということは、人間社会を持続性のある豊かさへ導くことだと思います。その豊かさの中に、祭り事なども含まれます。お正月など四季折々の祭り事が今の世に引き継がれていることはとても大切なことです。このような風習は、最初はある場所誰かが仕掛けたものかもしれませんが、それが広がり多くの地域で各世代にまたがって続いています。人々にそれを守っていかうとする意志があり、その意志を受け継ぐためにいろいろなデザインが行われているということだと思います。

それによって商売ができるように商売人を担ぎ込むことも持続性には重要な要素です。つまり、ビジネスをデザインするということにもなります。世の中、気合だけでは長続きするものではなく、人間社会の一部として存在するためには、経済活動が成り立つ仕組みづくりも必要になります。クリスマスも、お正月も、お花見も、そんな経済活動が含まれます。人は日頃の仕事で稼いだお金を、祭り事の際に日常とは違うレベルの消費に使います。普段節約している人が、財布のひもを緩めるハレの日です。心がなんとなく晴れ晴れとする気持ちになるのは自然です。人間の心の「引き締めと開放」というメリハリを生活の中に習慣として取り入れることができます。

一人一人の人生のステージにおいて、入学や各種表彰や結婚・出産など多くのハレの日がありますが、個人のハレの日はコンスタントに訪れるわけではありません。それに比べ慣習としての季節のお祭り事は、社会の中で生活する人全てに毎年訪れ、誰もが同様に生活に彩りを与えることができます。世界の中で最も若い世代が多く、経済の成長も著しいインドでは、年中いろいろな場所で盛大なお祭りがおこなわれているそうです。町ぐるみ国ぐるみになって行う祭り事はインド社会の中でとても大切な役割を果たしています。大きなエネルギーがそこで生まれ、人々の生きる力となっているのでしょう。

社会に生きる人間だからこそ、生み出したエコシステムが祭り事なんだと思います。アジアに旅すると、みなぎる活気を感じます。どこから来るのだろうと不思議にさえ感じますが、かつては日本にも同じようにあったに違いありません。貧しさから抜け出し、豊かさを求めて目を輝かせていたころの日本は、多くの祭り事にも心底情熱を注いでいたと思います。経済大国になるに従い、ハングリー精

神が減り、みんなで苦境を乗り越えようとする意識も薄れてきたのではないのでしょうか。ずいぶん豊かな暮らしになってはいますが、成長の激しいアジアの国々から日本だけ活気という意味で取り残されています。少子高齢化の先頭に立つ日本が新しい形での成長をするためには、今のままで良いわけがありません。

日本では高度成長期の後に、核家族化や大都市圏への人口集中などが進み、昔のような地元住民の協同体という意識が陰りを見せ、個人主義といわれる時代になっていきました。ただ、最近になってデジタル世代を中心にSNSなどネットを通じて仲間意識が新しい形で盛り上がりを見せています。この若い世代が仲間たちと一緒に祭り事を盛り上げれば、今まで以上に活性化するのはないでしょうか。地元の住民だけでなく、ネットで繋がった外部の人々も巻き込むと新しい可能性が起きる気がします。それこそ見ず知らずの海外の人々も巻き込めるかも知れません。京都祇園祭りや青森のねぶたなど観光客が既にたくさん参加する大型のお祭りではこれ以上の規模の拡大は必要ないと思いますが、地方のいたるところにある小さなお祭りに日本社会を活気づかせるヒントがあるのではないかと思います。東京など都市圏に集中する人口や消費や労働活動を地方に分散することが狭い国土の日本のあるべき姿だと思います。お年寄りしかいなくなり途絶えかけている小さなお祭りが勢いを取り戻すことが地方活性化に繋がります。2020年の東京オリンピック・パラリンピックも日本のいろいろな祭り事が世界に開かれる機会となるでしょう。全国津々浦々で行われている夏祭りの時期でもあります。

特に地域に根差した村祭りは住民の連帯感を築いてきた基盤であったはずですが。人口が減って若者がいなくなり、そんな村祭りも自然に消滅していきます。連帯感が必要な人そのものが少なくなるのだから仕方がないことだといわれます。しかし逆転の発想で、その村に若者がいるいないに関わらず、人が集い気持ちは高ぶるお祭りを仕掛けると、そんなお祭りがあるから若者がそこに集まってくるという循環はできないでしょうか。もともとお祭りがおこなわれていたということは、多くの人が生活を営む環境があったということです。そして祭りの中心になる神社などの神聖な場所もあるでしょう。日本は小さな島国ですが、都会から少し足を伸ばせばすぐに美しい自然があります。過疎の村といっても近距離にあるものが多く、電気や水道などのインフラもあります。人が減っても学校や病院など生活に必要な施設を必死に残している地域もたくさんあります。

今はネットで繋がることで仕事ができる時代となりました。田舎の自然や人間的な豊かさを求める人たちも増えて来ました。IT関係やデジタルデザインなど遠隔で仕事ができる人や、クラフト系のネット販売をする人など今の時代だからこそその職業は、住む場所の選択肢も豊富です。また先端技術を駆使した農業に興味を持つ人による村作りも増えるのではないのでしょうか。中には孤立を好んでひっそりと暮らしたい人もいるでしょうが、田舎暮らしの豊かさは顔見知りの人たちとの触れ合いだと思います。新しく移って来た人たちは、田舎ならではの静かな日常の中に時折訪れるお祭りで熱気を与えられ、メリハリのある生活を送ることができます。ネットで繋がった仲間がリアルやバーチャルで祭りに参加して新しい形の協働が起こるかもしれません。

「小さな村の物語 イタリア」というテレビ番組がありますが、日本の田舎にもたくさんの生活があり、美しい部落があります。世界で一番少子高齢化が進む日本だからこそその「美しい生き方」ができないものではないでしょうか。日本の田舎を愛する人たち、そしてお祭りという社会活動とをマッチングさせて心豊かな日本を続けられないでしょうか。

人生のメリハリにとって大切なお正月という時期に、改めて地域の祭り事に思いをはせてみました。脈絡のない長文にお付き合い頂き感謝申し上げます。